

石巻赤十字病院 消化器内科

【住所】〒986-0861 宮城県石巻市蛇田西道下71番地【病院長】金田 巖 先生【病床数】452床【内視鏡検査・治療数（H24年度）】上部消化管内視鏡検査 約450例/月、下部消化管内視鏡検査 約270例/月、上下部早期癌ESD 15例/月、大腸ポリペクトミー・EMR 55例/月、ERCP関連手技 45例/月【スタッフ】医師9名（内視鏡指導医3名）、看護師15名（内視鏡技師4名）



震災後拡大した広範な医療圏に対応し 専門性を強化して質の高い医療を提供

宮城県北東部唯一の救急病院として震災時の医療を支え拡大する医療圏の3次救急医療にも対応

石巻赤十字病院は、大正15年に日本赤十字社宮城県支部病院として創設され、80年以上の歴史と伝統を誇る地域中核病院です。石巻市、東松島市、女川町など人口22万人の石巻医療圏唯一の急性期中核病院として、圏内医療機関と連携しながら地域住民の健康を守っています。宮城県北東部の唯一の救命救急センター（地域救命救急センター）を有し、3次救急医療を提供していますが、三陸自動車道からのアクセスがよいことから多数の救急患者が搬送されてきます。年間救急車搬送数はここ数年県内第1位となっています。

赤十字病院の使命である災害医療への取り組みは、震災以前からハード面、ソフト面とも強化に努めてきました。平成18年には、それまでの北上川河口付近から、三陸道付近で交通アクセスがよく救急搬送に適した現地に新築移転を果たしました。宮城県沖地震の発生が予測されていたことから免震構造の建物に2重化電源、自家発電装置、非常用物資等も備えておりました。また同時に災害医療訓練や研修にも熱心に取り組んでおり、職員全体が高い防災意識をもっていたことが、震災に最大限生かされました。震災後すぐに災害対策本部が立ち上がり、院内にトリアージエリアが設けられました。この後押し寄せる救急患者はかつて日本中どこの医療機関も経験したことのない未曾有の数に上りました。またDMATをはじめとして全国の医療機関から応援部隊が駆け付け

ました。こうしたスタッフの活躍がマスコミ報道を通じて日本中に知れ渡り、被災地を支えた砦として今や全国から注目される病院となったのです。

また震災によって石巻市立病院などが被災したこともあって医療圏内外からの患者が押し寄せており、402床の病床稼働率は100%を超える状態が続いておりました。この



副院長
朝倉 徹 先生

非常事態に対応するため、本年2月、敷地内の駐車場に50床の仮設病棟（現南病棟）を建設しました。副院長の朝倉徹先生は、「増床によって救急患者が入院できないような満床状態は何とか回避できています。しかし今後三陸自動車道が整備され、また当院に隣接した新インターチェンジ（石巻北インター）が完成することでさらに広域から患者が集中することが予想されます。赤十字病院の使命でもある救急医療に関しては県北東部の防波堤となる決意であり、また各科とも急性期高度医療を提供していかなければなりません」とお話になりました。

消化器分野の診療体制を強化して 専門性の高い診断・治療を行う消化器内科が誕生

従来同院では内科の枠組みで消化器内科を診察しており、消化器専門医や内視鏡技師も少なく、この医療圏の消化器疾患の高度専門医療は主に石巻市立病院で行われてきました。しかし震災によって消失した市立病院消化器病センターが担ってきた機能を、その後は同院が合わせて担う必要が生じました。そこで昨年4月に東北大学より赴任された朝倉副院長は、まず優秀な人材を集めて診療体制を強化することに尽力されました。市立病院消化器センターの中心メンバーであった肝臓専門医の赤羽武弘先生、消化器疾患の経験豊富な富永現先生などをスタッフに加え、内科から独立した消化器内科として新しくスタートしました。朝倉先生からは「指導医層の充実により、上下部消化管、肝胆膵領域の全てで高いレベルの診察を提供することが可能となりました。震災以前と比べて、上部、下部消化管内視鏡検査は2~3割増となっており、EMRやESDなど早期癌内視鏡治療数は倍増しております。またERCP関連手技は3倍以上に、EUSは10倍に増えています。さらには肝炎のインターフェロン治療や肝癌RFA治療件数は激増し、東北でも1、2を争う数をこなしています。診療体制の変化や人材の強化により徐々に症例数が増えることはあっても、震災の影響とはいえ、これだけ劇的に症例数が増加することは全国的にも例を見ないと思います」と現状について説明されました。こうした状

▶次ページへつづく



Defining tomorrow, today
in Endoscopy.

況に対応するため、さっそく手狭になった内視鏡室の改装工事を
行い、今年6月から4室体制での運用を開始しています。また日本
消化器病学会や日本消化器内視鏡学会の指導医が3人以上と
なって専門医の修練施設に認定されたとのこと。現在病院の
計画として約3年後には16,000m²規模の増築棟が完成する見
込みということですが、ここには新救急救命センターや内視鏡セ
ンターなどが設置され、より充実した消化器診療体制を提供して
いくとのことでした。

同院はもともと研修病院としても人気が高く、現地に新築移転
した6年前から募集定員10名が常にフルマッチの状態、この春
も12名の選りすぐられた研修医が着任してきました。しかし朝倉
先生は「内科ストレート研修の一環として消化器を診るため、初期
研修期間には満足なトレーニングができません。我々スタッフも
常に忙しい中ではありますが、内視鏡、病棟カンファランスを通じ
て研修医とのコミュニケーションを取るよう心がけています。今後
は消化器の研修体制を整えて、現在2人いる後期研修医もどんど
ん増やしていく予定です」と後期研修や専門医教育に力を入れる
とのことをお考えを述べられました。



胆膵内視鏡治療のようす

診療体制の強化により多様化した手技に対応するため 内視鏡スタッフのレベルアップを推進

消化器専門医による診療体制が強化されていく中では、内視鏡
診療をサポートするスタッフにもこれまで以上の高い専門性が求
められています。これまで同院では内視鏡技師などがほとんどい
ない状態でしたが、震災前に内視鏡学会の認定施設であった石巻
市立病院で内視鏡業務に携わってきたスタッフがメンバーに加
わったのを契機に、内視鏡師スタッフのレベルアップにも取り組ん
でいます。中心となるリーダーは、「当院は従来から内視鏡室は外
来、検査の一部門として位置づけられ、スタッフが頻繁に入れ替わ
るため、内視鏡業務に集中する環境にはありませんでした。そのた
め内視鏡診療に関する知識や技術に乏しいスタッフも多く、内視鏡
業務に対する意識も差がありました。震災後は質量ともに増加す
る業務に対応するため、まずそれぞれの処置の目的や手技の流れ、
使用するデバイスをまとめて手技別のマニュアルを作成し、手
落ちや誤謬がないように努めています」と説明されました。内視鏡
専門医が増えたことで手技が多様化し、使用される内視鏡機器類、
処置具の種類もふえており、増加する業務のニーズに対応すべく、
外来スタッフの中に内視鏡業務を中心的
に行うチームを組織して、勉強会などを通
じて知識や技術の向上に努めているとい
うことでした。「今はまずスタッフ全員の
基本的な知識や技術の底上げをしてい
るところですが、人材が育ってきたところ
でさらに専門的な技術を身に付け、内視鏡
技師資格なども取れるよう、段階的な教
育の基盤を作っていくことが課題です」と
話されました。

最後に朝倉先生から「医療圏が広がり、
症例数の増加に対応しなくてはならない
現状を踏まえ、今年新たに病院の中期計
画を作成しました。3年後には新棟や教育
棟を増築してハード面を強化しながら、医

師180人、職員1,200人体制を築き、中核病院として規模拡大と
組織体制強化に力を注いでいきます。さらには地域における病診
連携、病病連携を一層深め、当院から医師やコメディカルをチ
ーム体制で地域へ派遣できるような取り組みも行っていきたい。
消化器領域に関しては現在新内視鏡センターの設計を行って
おりますが、規模だけでなく機能的にも他院の模範となる施設
にしたいと思っています。また消化器各分野の指導医がそろっ
て教育体制も整ってきたので、今後若手医師やコメディカル
教育に力を注ぎ、地域医療に貢献できる人材を育てていき
たい」と今後の展望についてお話しいただきました。

未曾有の震災を乗り越え、押し寄せる急患や増加する紹介患者
に対応しながら、新しい枠作りと体制強化に取り組みことは並
大抵のことではないでしょう。まだまだ震災の爪痕が残る当地に
あって、同院消化器内科ではチーム一丸となって、地域住民の
ために最善の医療を提供し、飽くなき向上心で日々診療にあた
られています。



消化器内科のみなさん